

SINAPIS



社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

月刊シナピスニュースレター

Vol.
124

2026. 9

年間テーマ「今こそ、戦争を未然に防ごう！」



のと被災地のかぼちゃを食べて熊本を応援しよう！

詳しくは4ページをご覧ください

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

カトリック大阪高松大司教区
社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784 FAX/06-6920-2203
Email/sinapis@ostk.catholic.jp
ホームページ/<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

巻頭言

今こそ、戦争を未然に防ごう



カトリック六甲教会 助任司祭

わたなべ てつろう
渡辺 徹郎(イエズス会)

「日本カトリック平和旬間」(8月6日～15日)では、日本のカトリック教会は心を合わせて戦争のない世の中が実現することを神に願い求めました。

しかし、平和を祈ることは本当に意味があるのでしょうか。第二次世界大戦が終結して80年経った今もなお、世界各地で戦争は繰り返され、各国は積極的に軍拡を進めています。このような現実を目の当たりにした時、祈っても無駄なのではないか、結局何も変わらないのではないかという疑念が頭をよぎることでしょう。

この祈りが叶えられないことへの不安に対して、前教皇フランシスコは以下の言葉を残しています。



求めても得られなかったことがどれだけあったか。だれもが経験しています。

扉をたたいても、開かれなかった経験をどれだけ重ねたことか。

そうしたときにも、しつこく、決してあきらめてはならないと、

イエスは忠告しています。

祈りによって必ず現実が変わります。必ずです。

たとえ周囲の状況が変わらなくとも、少なくともわたしたち自身が、

わたしたちの心が変わります。(中略)

祈ることは今後ずっと、孤独と絶望に対する勝利となります。祈ってください。

祈りは現実を変えます。それを忘れないようにしましょう。

事態を変えるか、わたしたちの心を変えるか、どちらにしても必ず変えます。

(p.101、教皇フランシスコ『十戒・主の祈り——教皇講話集』カトリック中央協議会、2020年)

「求めなさい。そうすれば与えられる。」(マタイ 6:7)というイエスのことばを信じて祈り求め続けることが、現実を変える力となるのです。

平和とは聖霊の実りであり、神によって与えられるものです。しかし、聖霊に動かされた個人の応答なしには実現しません。祈りによって、私たちが平和を享受するだけの者から、神の協働者として平和を築きあげる者へと変容させられた先に、戦争のない世の中が近づいてくるのでしょうか。

どうか私たち一人一人が「平和の君」(イザヤ 9:5)であるイエスと思いをついに一つにして、平和のために祈り、行動する者となることができますように。

【シナピス主催「ヒロシマ平和巡礼」に参加した中学生の感想文を紹介します】

平和の大切さと戦争のおそろしさ

なみはや教会

ホアン・ミン・ハン(中学3年)

私たち一人ひとりの人生において、生まれてから大人になるまで、誰もがそれぞれの体験を持ち、記憶に深く刻まれる忘れられない瞬間があります。

私も同じで、先日、私自身の特別な体験をしました。それは8月5日から6日までの広島における戦争と平和に関する様々な問題に触れる体験でした。

私たちは電車で広島平和公園に行きました。私たちの目に飛び込んできたのは、記念碑に飾られたカラフルで目を引く何千羽もの折り鶴でした。さらに奥に入ると、原爆資料館の展示内容に私たちはさらに驚きました。

最初に目にしたのは、原子爆弾の写真や地図、戦争前の広島市の生活を示すものでした。私には、白黒だけの写真に過ぎないけれど、百年前の日本の華やかさを感じ取ることができました。さらに進むと、原子爆弾が広島に落ちた直後の光景がありました。

周りは荒れ果てた野原、崩れた建物、木は一本もなく、死体が無残に散乱しています。熱線で骨さえ残らず消えてしまった人もいれば、重傷を負った人もいます。血があり、火がありました。

愛する人を失って泣き叫ぶ声、焼け焦げた体。私はとても怖くて、そこにいる人々がかわいそうに思えました。きっと彼らは大きな痛みと絶望を味わったに違いありません。私はその時代に生まれなくてよかったと心の中で感謝しました。

私の生きている時代は戦争から81年後です。今ここには戦争がなく、誰もが幸せで、血まみれになったり体が変形したりせず、特

に家族と引き離されることもありません。

今回の体験を通して、平和がどれほど大切か、戦争がどれほど悲惨かという教訓を自分なりに学びました。

私は皆が将来、家族と一緒に幸せに暮らせることを望んでいて、憎しみや戦争ではありません。

戦争は環境に大きな被害をもたらしますし、それに加えて人命も奪います。たった一つの核爆弾で何万もの命が失われることもあります。だから、今戦争がないことに感謝しなければと思います。

この体験は楽しいことも悲しいこともあり、少し自分を成長させてくれました。平和を築くために命をかけて犠牲になった人たちには感謝しています。おかげで私たちは幸せな環境で、怯えることなく生活できるのです。



左:広島平和公園の「原爆の子の像」

別名:千羽鶴の塔

原爆被害による白血病を12歳で発症し、闘病の末に亡くなった佐々木禎子さんをきっかけとして、原爆で命を落とした子どもたちの慰霊と平和への祈りを込めた像がつけられました。

右:原爆ドーム 爆心地から約160m

原爆投下時は、「広島県産業奨励館」

1996年に世界遺産登録

高知県の教会を訪ねて

～平和旬間月間行事振り返り～



事務局 おかだ まさよ 岡田 雅代

高知県には、3つの教会(江ノ口、中島町、中村)と2つの礼拝所(安芸、赤岡)があります。

7月末、安芸礼拝所を訪れると、掲示板には「7月のミサは14日16時のみ」と張り出されていました。日ごろは人の出入りが少ないであろうその建物も庭も整えられていて美しいのです。きっとどなたかが頻繁にお掃除・草取りをされているのでしょう、信徒の方の姿勢がそのまま映し出されているようで、忘れがたい風景となりました。

そして赤岡礼拝所。ここはクーラーが設置されていないということもあり、夏の間はミサが行われていないとのこと。そのため、信徒の方は高知市内にある江ノ口や中島町まで出かけておられるそうです。

そのクーラーのない蒸し風呂のような聖堂で、傍らに置いた扇風機の風で涼をとりつつ、祈っておられる信徒の方に偶然出会うことができ、このことを教えていただきました。

中島町教会では、平和祈願ミサのあと「平和旬間月間行事」が行われ、さらにその後は、信徒会館に移動して茶話会です。

そこで信徒の方が話された「今はまるで戦争前夜のような。(戦争を防ぐために)あきらめずに行動しなければならない」という言葉が、私のなかにねじ込まれたようで、いまなお思い出されます。

大阪高松大司教区では、平和旬間月間に限らず、様々な場面で「わかちあい」が行われています。人と人が膝を突き合わせて意見

を述べ、聴くとき、そこには必ず、お互いが耕し合うような影響を与え合います。何か結論を出す話し合いはもちろん重要ですが、そうではなく思いや意見を聞き合うという、現代の基準で一見すると成果が見えず、効率も悪いと、切り捨てられがちなこの時間こそ、私たちは大切にしていきたいと改めて思いました。



話は前後しますが、中島町教会に着いたとき、真っ先に目に入ったのは大きな掲示板とその幅いっぱいにおかれた折り鶴でした。

「アシジの聖フランシスコの『平和を願う祈り』と「平和を願う歌と朗読を聴く会〈あなたは平和の為に何ができますか?〉」のポスターも貼られていて、「教会では平和を訴える行事を行っている」ことが、そこを通る誰にでもわかるようになっていました。

この時期、日本全国のカトリック教会の掲示板は、声を合わせて「平和を訴えて」います。道行く人たちに私たちが「平和」を一斉に訴えることができる「カトリック平和旬間(大阪高松教区では「平和旬間月間」)をこれからも大切にしていきたいと思います。

能登から熊本へ 合田さんちのかぼちゃを食べて、 熊本を支援しよう!!



輪島市の山間部に暮らす合田さんが、かぼちゃをたくさん育ててくれました。

「そろそろ取りに来て」と連絡が入り、8月上旬、収穫に行き、400個近くいただきました。

今、茨木の『愛と光の家』の地下倉庫で保管しています。

2024年元旦の大地震と9月の豪雨災害のあと、カリタスのとサポートセンターは孤立する被災者の見守り訪問を、週に一度続けてきました。合田さんが暮らす空熊町そらくままちは、真冬には1メートル近い積雪となります。さすがに2年目の冬は市内の仮設住宅に入りましたが、雪どけとともに家へ戻った合田さんに、「できた野菜は関西でさばくから」と励ましの思いで伝えたのがきっかけです。

合田さんはとても開かれた方で、シナピスチームの難民さんたちを好奇心いっぱいであげてくださり、彼・彼女の置かれた状況に心を痛め、イラン料理やペルー料理を楽しみにしてくれました。「家族やお国が心配なのに、こんな遠くまで、ありがとうね」と繰り返し、車が見えなくなるまで手を振って見送ってくださる姿を見るにつけ、親戚のおばあちゃんを訪ねているような思いを感じてきました。

「種代と肥料代(鶏ふんのみ)は農協に出荷した分で元を取っているから、売り上げはすべて皆さんの良いようにどうぞ」と話す合田さんは、これまでの見守り訪問への感謝を、このかぼちゃ栽培に込められたと感じます。

シナピスでは、いまだに家の修繕を続けている合田さんの労働の実りを、7月28日に再び大地震に見舞われた熊本の被災者支援に送らせていただきたいと思います。

能登から熊本へ！



被災者の助け合いの輪に入らせていただくことに感謝しながら、このキャンペーンを進めたいと思います。

*かぼちゃはご協力いただける教会まで、週末までにお届けいたします。大きいサイズのものはかなりの重さなので、切り分けての販売をおすすめします。

詳しいことは、事務局の大森までお問い合わせください。

TEL:06-6942-1784 MAIL:omori.y@ostk.catholic.jp

戦時中に地図から消えた「毒ガスの島」



フリーライター おおもと あさみ 大元 麻美

瀬戸内海国立公園に指定されている大久野島（広島県竹原市忠海町）は、忠海港からフェリーで15分の場所にある“リゾート地”。

「うさぎの島」として知られるが、周囲約4kmの散策コースを2時間かけて歩くと、島中に大日本帝国陸軍（以下・旧陸軍）の戦争遺跡が多く残されていることに驚かされる。



大久野島毒ガス資料館

この島には、1929（昭和4）年から1945（昭和20）年の敗戦まで旧陸軍の毒ガス工場があった。国際法で使用禁止の毒ガスを製造していたことから国際的な監視の目からすり抜けるため、島の存在を日本地図上から消し去ったほど。誰にも知られてはいけない「秘密の島」だった。

島内にある世界で唯一の「毒ガス資料館」には、大久野島の歴史を知ることができる数々の証拠が展示されている。当時のガス工場以最も重点が置かれていたのは、発がん性物質の「イペリット」の製造だった。呼吸困難を伴う難治の慢性気管支炎を発症させ、また咽頭がんや肺がんなどを引き起こす猛毒だ。イペリットをはじめ、ルイサイト、青酸など、この島で生産された毒ガスは6千トン余り。日本軍はその効果を証明するため、中国で人体実験も行った。

そして戦時中、特に中国で大量に使用し、多くの中国人を死傷させた。さらに敗戦後は大量の毒ガスを中国に遺棄したため、現在も道路工事や建設工事等の際、地中からそれらの毒ガス弾や毒ガス缶が出てきて、中国の人々を苦しめている。

当時、大久野島の毒ガス工場で働いていた従業員は、総勢約6千500人以上。中には徴用令により強制労働させられた16歳から19歳までの少年、また国家総動員法によって動員された学童も含まれていた。従業員たちは防毒服を着用していたものの、不完全なものであったため、被毒し呼吸器系・消化器系の病気を発症し、多くの死者を出している。元従業員は「被害者」として苦しみながらも、対戦国で多くの毒ガス犠牲者を出したことを知り、「加害者」としても苦悩したという。

敗戦81年を迎えた今年、日本政府は、何事もなかったかのように戦争ができる国としての準備を着々と続けている。

戦争は、どんな大義名分があろうとも、単なる人と人の殺し合い、奪い合いに過ぎない。

そして犠牲になるのは、いつも“真実”を知らされないまま戦場に駆り出される庶民だ。

戦争は勝ち負けに関係なく、尊いいのちが失われ、取り返しのつかない多くの“負の遺産”が残る。大国の思惑に踊らされることなく、「非戦」を宣言した「憲法第9条」の大切さをあきらめずに発信していきたい。

日本カトリック平和旬間 in 沖縄

あわせ 泡瀬教会(沖縄市) やまだ けいご パウロ 山田 圭吾

1981年2月、教皇ヨハネ・パウロ二世が来日。広島訪問の際、「戦争は人間のしわざです」で始まる平和アピールは「平和の巡礼者」として強烈なメッセージを残した。

日本のカトリック教会はそれを受けて、翌1982年に「日本カトリック平和旬間(8月6日から15日)」を制定。以来、毎年この期間には日本中で平和祈願ミサが捧げられ、様々な平和行事が開催されている。

沖縄のカトリック教会でも、期間中に各教会でミサが捧げられているが、教区全体としては8月



15日に開催される「祈りと平和の集い」(主催:沖縄宗教者の会)に参加が呼びかけられている。場所は沖縄戦終焉の地と言われる「沖縄平和祈念堂」(糸満市摩文仁)。

平和を祈り求めるためには「まずは宗教者同士が仲よくしよう」とのことで呼びかけられ、『沖縄から世界へ広げよう平和の祈り』をスローガンに、キリスト教、仏教、神道、新宗教等、それぞれの宗派教派から、また遺族会の方々も参加して祈りが捧げられた。

34回目の今年の開会のことは、ウェイン・バートン司教(那覇教区)が担

当。自身が沖縄に宣教師として派遣された1970年代当時のエピソードを交え、敵国同士であったアメリカ人を受け入れてくれた名も知らぬ高齢女性との関わりから、「人を、命を大切にする」文化との出会いと平和を求める祈りと活動の大切さを述べた。

さて、8月15日は「終戦記念日」と言われているが、「終戦でなく敗戦だろ

う」と言い換えを訴える人もいるようだ。しかし、世界的には9月2日に行われた降伏文書調印式をもって戦争終結の日とされているのではないか。



しかしまた、沖縄での降伏文書調印式は9月7日になってから、現在の嘉手納基地内の沖縄市地域で執り行われており、沖縄市では沖縄戦終結の日としてこの日を「沖縄市民平和の日」として定め、8月1日から9月7日までを沖縄市平和月間として様々な行事を企画運営している。

どこかでけりをつけないといけないのだろうが、沖縄戦体験者の証言を聞くと、捕虜になって収容所に収容された日とか、故郷に帰った日とか、「終戦の日」は個々人でそれぞれ違うようだ。

また、いわゆる戦後と言われる現在でも沖縄戦当時の不発弾で被害を受けたり、戦場を逃げ惑った中で、家族を亡くしたり、障害を負ったり、またその精神的な痛みを引きずり、それが家族への暴力になったりで、あれから81年経ったといえども、いまだに終戦の日は来ていないと言う人も大勢おられる。

私の叔母(父の妹)は、奄美大島から働きに行っていた長崎で被爆し、9月8日に帰天(18歳)。

しかし、私が叔母の存在を知ったのは戦後40年経ってからのことだった。父は男5人だけの兄弟だとずっと思っていたのが、系図の話になったとき「実は・・・」と叔父に伝えられたのだった。

沖縄戦では戸籍等の記録が失われ、忘れられている人も多い。生まれてきたことさえも知られずに亡くなった人がいることも想い、すべての戦争犠牲者のために、そして平和な世界を築いていくためにも祈り、働かねばと思う。

私たちはこの土地を離れない！ がれきの下の殉教者 … 無言の抵抗

シナピス運営委員 にしぐち のぶゆき
西口 信幸

ガザの人々はまるでこの時代に属していないかのようだ！

約３年間、瓦礫の下に埋もれた殉教者の遺体を、
ほとんど何の手段も装備もなく、一人ひとり瓦礫の下から掘り起こした。

その後、男たちは殉教者の遺体を肩に担ぎ、
悲しみに満ちた女たちは家の窓やバルコニーから花を降らせながら、
彼らを最後の旅立ちに送り出した。

おそらくガザの人々は本当にこの時代に属していないのかもしれない。

絶えず不平を言い、忘れ、捨て、鈍感になるこの時代にあって、
ガザの人々は最も重い苦難の中にあって、忠義、誠実さ、優雅さ、
そして人間の尊厳を守り続けている。 (SNS 投稿より)



８月４日、ガザ市で１１２人の市民を弔う歴史的な集団葬儀が行われました。これは瓦礫の下で再会を待っている１万人の魂たちへの思いを世界に示す儀式でもありました。

２０２３年１１月の爆撃で大家族３０８人の命が一瞬にして奪われました。ドローン攻撃から逃がれて、長老の建物に逃げた、まさにその瞬間…Ｆ-３５戦闘機が次々と重爆弾を投下…そして、全員が殺されました。…一人残らず…！

重機の搬入阻止により、遺体は今でも瓦礫の下に閉じ込められたままです。イスラエル軍の最後の人質返還で数人の捜索のため、赤新月社の大型重機が運び込まれた時、ガザの人たちは周りで、どんな思いで眺めていたのか…ただ黙って見つめていました。

イスラエルは驚くべき速さで証拠隠滅を進めています。瓦礫を粉砕し、残骸をトラックに積み、離れた場所へ輸送しています。ネタニヤフの「撤退しない」という言葉のように、イエローラインによって占領を拡大しています。

救急隊４０人は手作業で１７日かけて瓦礫から遺体を回収しました。骨のかけら、衣服の断片のみ、蒸発してもどらなかった１９６人、男性は担ぎ、女性は花びらを降り注いで、薄い国旗に包まれた亡骸に別れを告げました。

「私たちの家族の物語を語ってください」というガザの声にも世界は沈黙し、メディアも伝えません…３０８人も殺された事実がわかっても、ガザの「ジェノサイド」で何人が殺されたのか、永遠に知ることはできないのでしょう。

殺戮と破壊の中でも、平和に共存する文化を育ててきたパレスチナの人々は「歴史の天使」として、受難を通して「人間の尊厳」とは何かを訴えてきました。彼らの声を通して、私たちの主は世界中からむしり取って生きている私たちの姿を露わにし、回心と呼びかけています。

映画『ヒンド・ラジャブの声』

シナピス運営委員 ^{にしぐち}西口 ^{のぶゆき}信幸

国際刑事裁判所(ICC)の所長、赤根智子さんへの制裁を、アメリカはネタニヤフ首相の訪米の後、決定しました。これが、ガザのジェノサイドを止めるために「自分ごと」として何もしない私たちが招いた結果です。国際法を犯しても咎められないイスラエルによる法秩序の崩壊は止まることがありません。日本にも大きな影響があると気づいた人も多いのではないのでしょうか。

同じタイミングで、ガザの小さな少女に起きた一つの悲劇と、少女が救いを求めた実際の音声記録をもとに作られた衝撃のドキュメンタリー・ドラマが公開されます。この事件の真相究明のため、「ヒンド・ラジャブ財団」が結成され、ICCへの提訴、先月のニュースで紹介した国連の「子どもジェノサイド」認定にも繋がったのです。ガザで何が起きているのか、考える機会として、この映画を紹介します。多くの人に観て頂き、何かを感じて頂けるよう、願っています。



映画『ヒンド・ラジャブの声』

本年度アカデミー賞ノミネート
ヴェネチア国際映画祭グランプリほか

関西では大阪・京都・兵庫の8つの劇場で、
2026年9月4日から公開されます。



2024年1月29日、西岸地区の「赤新月社」に緊急電話、
ガザで6歳の少女が助けを求めている。 通話を繋ぎ、
救出するためにあらゆる手を尽くすスタッフたち…
少女の名前はヒンド・ラジャブ

「あたしをうってる」「はやくきて」「むかえにきて！」



この後、355発の銃弾が彼女のいる車に撃ち込まれた。
「イスラエル」への何重もの「お伺い」を立て、「許可」された
はずの救援ルートで、救急隊員は爆殺され、後日発見された。
…….なんという不条理
「なんという悲劇」と、他人ごとのように語れるのでしょうか。
ヒンドちゃんの声に応えるのは、日本にいる「私」でもあります。

ガザは、私たちが気づかない世界の変質を見る「リトマス試験紙」です。
シナピスニュース8月号で「子どもジェノサイド」と認定した国連の報告をお伝えしました。
今月号でも、ガザの人々は無言の行動で「人間の尊厳」を訴えるガザの声をお伝えしました。
「飢饉」を見て動きそうになったはずの世界は、なぜか今また沈黙を続けています。

今、私たちに何かが問われています。同じ事実に向き合って、いのち・人権を大切にする者として、平和を愛する者として、キリスト者として、何もできない私たちはどう向き合えば良いか、考えて見ませんか。この映画で大きな反響が起きて…何か奇跡が起きるかも…ガザの人たちは何を思っているのでしょうか。一人ひとりのモザイクで地球は形作られています。

皆さん、知ってますか!?



私たちが夢見た「多文化・多民族共生社会」の行方

毎年のように出入国管理及び難民認定法(以下・入管法)が変更されている。日本から外国籍住民が消えるのではないかと懸念するほどの内容で、私たちが夢見てきた「多文化・多民族共生社会」の実現とは真逆の政策と言える。今回、その一部を紹介したいと思う。

内容	変更前	(施行日)変更点	
(A)在留資格「経営・管理」の審査要件	資本金 500 万円以上	(2025 年 10 月 16 日から) 資本金 3000 万円以上、また日本に居住する常勤職員1人以上を雇用する義務など	
(B)在留資格の更新申請・変更申請の手数料	昨年 4 月に 4000 円から 6000 円に値上げたばかり	(2026 年 10 月1日から)	
		在留期間	窓口申請手数料
		① 3カ月以下	1万円
		② 6カ月以下	1万 8000 円
		③ 1年未満	2万 5000 円
		④ 1年	3万 3000 円
		⑤ 3年未満	4万 8000 円
		⑥ 5年未満	6万 4000 円
	⑦ 5年以上	7万 5000 円	
	入管法の上限額1万円	入管法の上限額①～⑦いずれも 10 万円	
(C)永住許可申請の手数料	手数料・入管法の上限額 共に1万円	(2026 年 10 月1日から) 手数料 20 万円。入管法の上限額 30 万円	
(D)在留資格「永住者」の取り消し	刑法違反などで1年以上の懲役刑となると永住資格取り消し	(2027 年4月から) 入管法違反や公租公課未納の場合に永住資格を取り消すことができるよう制度拡充	

まず (A) の「経営・管理」の対象に含まれているのは、地域で親しまれているエスニック料理店だ。現在、黒字経営であったとしても、今後は在留資格の更新の度に資本金 3000 万円以上を持っていることを証明しなければならない。この条件を満たせずに、既に店をたたむ人も出てきている。

そして (B) の在留資格の更新手数料の大幅な増額も、具体例を挙げればその異常さがよく分かる。今年 7 月に公表された法務省・出入国在留管理庁(入管庁)の「永住許可に関するガイドライン案」(今年 8 月 4 日改定案/来年 4 月実施)によれば、5 人家族の在留期間が 1 年の場合、5 人家族で毎年 16 万 5000 円の更新手数料を求められることになる。

さらに (C) の「永住者」の許可申請の手数料は 1 人 20 万円になった。5 人家族なら手数料は 100 万円になる。日本のカトリック教会は信者の 2 人に 1 人が外国籍と言われている中で、この更新手数料の大幅な引き上げによって、外国籍の信徒・修道者・司祭等も苦しめられることになるだろう。

その他、入管庁のガイドライン案が波紋を広げている。永住許可の要件の一つとして、独立生計要件が「日本人世帯の平均を上回る年収水準」であること、また「この年収で厚生年金に 30 年加入していた場合に受け取れる年金受給額」に達していることなどを挙げているからだ。いったい誰が永住資格を取得できるというのだろうか。

粋な誕生日のお祝い

泉南教会のミサにあずかった時のこと。ミサの最後に「7月と8月生まれの方、どうぞ前に」と呼びかけがあり、誕生日月の人たちが祭壇の前に並びました。ミサを立てたイポリト神父さんとモヨリ神父さんが歩み寄り一人ひとりに静かに按手して祝福をし、終わると「さあどうぞ皆さんのほうを向いてください」と促しました。「お誕生日、おめでとうございます。私たちからのお誕生日のプレゼント、それはみんなからの祈りです」とイポリト神父さんがおっしゃると、聖堂内いっばいに祝福の拍手が響きました。なんて温かく素敵な贈りものだろう、と私も思いきり拍手しました。

国際結婚組あるある「家庭内造語」

私の夫はペルー出身ですが、30年以上一緒に暮らしていても、いまだに文化や言葉の認識の違いからくる面白い発見があったり驚きがあったりして、生活は全く飽きることがありません。特にうちは夫婦ともども能力的に外国語習得には苦勞するタチで、言葉の面では何かと摩擦や誤解が生じています。

私も夫も結婚当初はお互いが日常的に使う言葉をまねて覚えたものです。ですから夫は女性的な日本語を、私は野郎スペイン語を覚えてしまう傾向がありました。

また、夫は若い時に「ただいま」と「おかえり」の使い方を逆に覚えこんでしまい、帰宅すると「おかえり～」と言いながら家に入り、反対に家族が帰ってくると夫は家の中から「ただいま」と声をかけたものでした。そのたびに「逆、逆！」と教えるのですが、最初に間違って頭に入れてしまったせいか、なかなか修正が利きませんでした。しまいにはこどもたちは夫が玄関先で「おかえり～」と言うと、家の中から「ただいま～」とツツコミをいれるようになりました。

そのほか、誤って覚えた発音がそれなりの意味を持って伝わることもあります。料理中にこどもたちに「味見して」とスープなどを小皿に入れて味を見てもらいます。夫はそれを「アジミツケ」と覚えてしまいましたが、その音は「味見つけ」と意味を持った当て字にでき、何だか可愛らしくて家庭内ではそれが定着しました。

ところで夫は最近、緑内障と診断を受けました。私はひどく心配したのですが、夫は「リョクナイショウ」を「ヨクナイショウ」と発音し、それが私には「良くない症」に聞こえました。眼の病気からすると白内障より緑内障のほうが深刻ですから、「良くない症」もそれなりに意味が通じるではありませんか。こうして家庭内だけで生まれた造語はそのまま放置され習慣化され、ある時う

っかり外の人の前で言っちゃって冷や汗をかくこともしばしばあります。

結婚した息子が妻を連れて我が家の扉をあけたら、奥からお父さんが威厳のある顔で「ただいま～」って。



のとから熊本へ

のと被災地のかぼちゃを

食べて、熊本を支援しよう!!

*詳しくはニュース4ページをご覧ください



シナピスホーム（カフェ）
9月の予定

ランチ：19日

★土曜日の11時頃～16時頃

★ランチは要予約

☎ 080-8940-8847

カフェ：5、12、26日

★土曜日の13時頃～16時頃

インターナショナル・デー INTERNAYIONAL DAY

外国人が暮らしやすい社会をめざして！
各国料理の出店・歌や踊りのステージ

2026. 10. 18 Sun

大阪高松カテドラル聖マリア大聖堂



11時～ 国際ミサ
12時半～ 交流会

「ニュースレター配布停止」、
「点訳版の郵送」をご希望の方は
シナピスにご連絡ください。

☎06-6942-1784

あとがき

3月中旬より休職していましたが、8月より少しずつ復帰することになりました。たくさんの心配の声をいただき、ありがとうございました。本当に嬉しかったです。復帰してからというもの、の忙しさの中で、予定していたことが緊急事案で覆ったり、当日の朝に1本のLINEが来て考えていた予定ができなくなったり、休職前に当たり前のようできていた仕事思うように頭が働かず、「ああシナピスはこうだったなあ」とある意味他人事のように冷静にみている自分もいます。この忙しさは世の中に反映しています。それだけ様々な問題がたくさんあるからです。私もボーっとしてないで、はやく感覚を研ぎ澄ませながら仕事をしていかねばいけません。頑張りますっ！またみなさまにお会いできるのを楽しみにしていますね。どうぞよろしくお願いいたします。（なおこ）

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

◆広報活動

- ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等社会活動の指針の伝達
- ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携

◆学習会研修会の企画

◆こども基金

世界・日本のこどもたちへの援助

◆日本カトリック司教協議会との連携

正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣

◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ

◆難民移住移動者支援

難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル

☎ 06-6941-4999

アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪高松大司教区事務局内



●公共交通機関ご利用の場合

JR 森ノ宮駅より 約 1000m

地下鉄中央線森ノ宮2番出口より 約 800m

JR 玉造駅より 約 1000m

地下鉄長堀鶴見緑地線玉造1番出口より約 800m

●車でお越しの場合

阪神高速13号東大阪線法円坂出口

法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします

☐郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪高松大司教区

代表役員 前田万葉

☐三井住友銀行 玉造支店 普通 9401958

カトリック大阪高松大司教区 シナピス

代表役員 前田万葉

☐オンラインはこちら →→→

